

10カ月で「抱えない」実現

施設と福祉機器 第51回
活用すればこれだけ変わる

わずか10カ月で人力による「抱え上げない介護」を実現した特別養護老人ホームがある。北海道函館市の「潮寿荘」(柏原美之施設長)だ。成功の秘訣は先進施設に学び、機器と一緒ノウハウの導入にも予算と時間をかけたこと。移乗ケアの見直し(なにより潮寿荘は、利用者への自立度が向上し、職員が働きやすい施設へと生まれ変わった。(井口拓治)

特別養護老人ホーム 潮寿荘(北海道)

社会福祉法人井井福祉会が運営する潮寿荘は、任と東京・日の出町の、個室の身体機能付に入所定員50人(平均要介護度4.45)の従来型施設。抱え上げない介護のきっかけは、一職員が腰を痛めることなく、定年まで働ける職場にしたいと考えた柏原施設長が2015年自ら、介護主として行った。ひとりでホームを視察、合せてリフトや移乗ホ

ノウハウ一緒に導入

ド・シートを使い分けて5回ほど行った。残業代はかからなかったと柏原施設長は振り返る。原施設長は振り返る。また、2000万円の予算を組み、16年1月に座った利用者の姿勢がまっすぐで仙骨座りの入らない状況を見た柏原施設長は、これを手本に抱え上げない介護に取り組むことを決意。9月に理学療法士(P.T.)を採り入れたのを機に、取り組みを開始した。まず、10月にリフトメーカー4社にリモコンも車いすも調整機能が付いたリフトストラクター「クトロモ」22台、練松家移乗ケアのノウハウを学ばせることに、ひのでホームに派遣して指導させた。そして地道な勉強会と



利用者も職員も負担にならないリフト移乗で離床回数が増えた



浴室の移乗はローラーマットが効果的



座位保持能力がある人の移乗はボードを使う

2人がL資格取得 実践を繰り返して、8月には、2人を講師にリモコンを使って勉強会を開くまでには、非労働を言わない職員に受講させ、Lのチェック項目をクリアした職員だけがリフトを使うようにした。11、12月の勉強会を人当たり使用者45人中、30人が見守り、一部介護10人がサポート、5人がリフトでベッドから車いすへ移乗。移乗方法は個々の残存機能に合わせて選んで、入浴は11人が一般浴、22人がリフト浴、17人が寝式機械浴を使用。機械浴はリフトやボードを使って車いすからストレッチャーに移って入浴後、マットで着替え向に移乗する。排せつは便座に座ることを基本に、37人が一部介護などで便座に移乗、介護認知症者など5人がおむつを使用。8人は背もたれ付きのシャワーチェアに座り、安楽な姿勢を保持しつつ排せつを促す。ボードやリフトが使えない、この場面の移乗が課題になっている。抱え上げない介護を始めて1年7カ月、職員に気を使い離床回数を減らしていた人が「リフトは自分にも職員にも負担がかからない」と離床回数を増やすようになった。また、調整機能付き車いすの導入により、仙骨座りがなくなり、ボードで移乗していたリフト使用中者が自力で車いすに移乗できるようになるなど自立度が向上する人が増えた。一方、職員の負担も大幅に減少。リフトを導入前は、移乗介護時に腰を痛める職員が年間3、4人はいいたが、導入後は1人もいなくなった。リフト使用者が減ってボード使用者が増えたり、車いすの調整をP.T.でなく庶務主任が担当したりするようになるなど当初の予定と違うことも多くあったという柏原施設長。「ひのでホームが惜しみなくノウハウを教えたこと、職員の努力とチームワークがあつてここまで来られた。でもこれは第一歩。継続と向上が本場のチャレンジ」と話す。施設長を中心に職員が一丸となって取り組めば、10カ月で抱え上げない介護を実現できる。潮寿荘の取り組みは、その証であり、今後多くの施設の道標になるだろう。

埼玉県所沢市の特別養護老人ホームを尊重し、注意や禁止の指示を出しにくい状況で、職員も利用者も負担にならないリフト移乗で離床回数が増えた